

矢野 晴彦

佐藤 克之

斉藤 省司

稲葉 政文

遠藤 節

加藤 繁木

鴨川てんし



増山 浩一



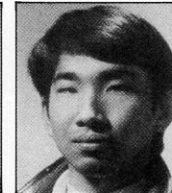
小沢 俊明



奥野 弘明



服部 博行



小嶋 章



渡辺 裕



三上 伸行



舟竹加代子



大出 友子



俵 千賀



三浦 千美



山口まゆみ



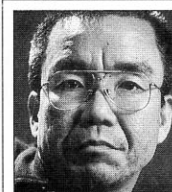
山名 淳子



伊藤 幸恵



矢動丸純子



おかべ こうだい  
岡部 耕大

- 1945 長崎県松浦市に生まれる。
- 1964 佐賀県立伊万里高校卒業
- 1968 東海大学中退
- 1970 劇団「空間演技」設立
- 1978 「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞受賞

岡部耕大 作・演出、劇団「空間演技」公演は、現在36本を数え俳優座、文学座、青年座への、脚本執筆と共に、1985年、松浦でロケを行った、TBS、日曜劇場、精霊流しを始め、現在、映画、テレビの脚本と活躍中。

# 風の墓を背負った私

懐かしの一九六〇年代の歌を聞きながら、開幕ベルの鳴らないその舞台は始まった。ここは、終戦間近の南十字星輝くマレー半島。罪もない島民を殺してしまう日本兵国分は、その罪を背負って巡礼の旅へ。

そして舞台は昭和三十七年、夏の肥前松浦高校剣道部にスライドしていく。テニス部のマドンナ、ブスの演劇少女、不良・優等生など、青春グラフィティーに欠かせないキャラクターが次々に登場してくる。演技力のついた空間演技の若者たちによって展開される青春グラフィティーは、見ている観客をして懐かしの高校時代へと、思いをはせさせずにはいられない。

その中で特筆すべきは、剣道の立ち回りがあろう。あの狭い空間を、十数人の若者たちが重なりながら、竹刀(しな)も折れんばかりの戦いぶりを披露してくれる。その日ごろの鍛練は想像を絶する。東京に多数ある劇団の中で、この迫力においては空間演技を超える劇団は皆無だ。

# 『風の墓』を観て

廃坑を余儀なくされたさびしい時代を背景に展開される青春賛歌。そこに罪を背負った国分が現われ、国分と昔の恋人(今はフツの母になった女)との出会いで物語はクライマックスを迎える。大地にシッカと根を下しているその女が去ってしまったとき、風の墓を背負った国分ははじめて、風の免罪符を受け取ったのではないだろうか。

ラストシーンで、過去に生きた国分と、永遠にチョウを追いつける禪宗と、未来が大海原のように広がっている兵頭一兵くんの三人を同空間に立たせた岡部耕大は、何とすさまじい生き方をしてきた人だろう。

人の生と死を、しっかりと見つめたものは涙なくしては見られない。それほど大きな愛を私たちに見せてくれるのだ。

願わくば、長崎をはじめとする地方の皆様にも、この愛の風に触れる機会のあらんことを祈ります。

(女優、講談師・福岡県出身)  
「長崎新聞」より

神田 紅

## 続『力道山』

“蒼き人月に吠える”日活撮影所編

1989年 新宿紀伊國屋ホール 3/30~4/6

◎名作『力道山』“まだ観ぬ蒼き貌の人”で一家離散した大徳家の人々はどこへ行ったか? 『力道山』の舞台(昭和31年)から七年が過ぎた。時は、昭和38年、あたかも東京オリンピック前夜……。祖父大徳蔵人と、その妻睦子は、調布日活撮影所で守衛をしていた。そこには力道山に拮抗するスターがいた。名を石原裕次郎といった。虚と実がないまぜに生きる撮影所を舞台に、大徳家の人々が集まる。

「ここを書きたかったんだ」言わずもがなのことを岡部耕大がうそぶいたりする。キャッチフレーズは“あなたをきっと泣かせてみせる。赤いハンカチを五枚御用意下さい”になるだろう。

## 『闇市愚連隊』

1989年 下北沢本多劇場 9/21→9/27

◎構想五年!! “ヤミ市においては、国籍、階級、身分、出身、学歴等は一切問われなかった。華族も、ヤクザも、軍人も、被差別窮民も、解放国民も同格であり路上に一枚のゴザを敷いて、貧しい品物を売るところから出発した。身分制の呪縛と差別の長い歴史をもつ日本において、これは画期的なでき事だった……。”

映画、舞台がいままで描いた闇市とはまったく異質の、岡部耕大原色の世界……。

待望久し、岡部耕大なつかしの総天然色カラーシネマスコープ、オールスターキャスト作品!! になるはずであるが……。もう一年、お待ち下さい。